和's YAMATO（わずやまと）

2024
夏号

■ 源氏物語と藤原氏
紫式部の結婚と藤原道長の策略

● 歴史の舞台となった街道　日光御成街道

● 郷土史跡めぐり
中ノ峯古墳（群馬県渋川市）

● 群馬の芸術家　原　誠二

● お客様紹介　森産業株式会社 様

● 写真で楽しむ群馬の自然
「丹生の丘ひまわり畑」

「夏のみのり」　須藤和之 画

写真で楽しむ 群馬の自然

丹生の丘ひまわり畑 《住所／群馬県富岡市下丹生》

7月下旬～8月上旬、富岡市にある丹生（にゅう）湖畔の小高い丘に、7月下旬から8月初旬まで約11万本を超えるひまわりが咲き誇ります。妙義山を背景に、約1.5ヘクタールの畑が黄色に染まる絶景を楽しめます。

撮影　藤重朋紀氏

略歴
1952　群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971　群馬県渋川高等学校卒業
1972　東京写真専門学校中退
1979　コマーシャルフォトスタジオ創美社
2001　フリー
2010　写真集「上州路·一本桜」
2011　写真集「上州路」

表紙の絵「夏のみのり」／F6号

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業　2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了　2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得　博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展（画廊翠巒）（同2011～24）　2011年 中央電機商会カレンダー原画（2011～24）　2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作　2014年　個展（日本橋三越本店）（同2017,20,23）
2017年 群馬県展 県知事賞　2016年 個展（株式会社ヤマト）
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品　2020年 上毛芸術文化賞受賞　2022年 個展（株式会社ヤマト）
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作　現在 日本美術院院友 群馬県美術会会員 慶應義塾大学非常勤講師（2013～24）
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET　URL http://sutooo.net/

和's YAMATO わずやまと
2024年夏号（第61号）

《和's yamatoの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO夏号／2024年（令和6年）6月発行
発行：株式会社ヤマト広報室　群馬県前橋市古市町118　TEL.027-290-1891　FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト
【発行】株式会社ヤマト　〒371-0844 群馬県前橋市古市町118　TEL：027-290-1800（代）　FAX：027-290-1896
支　　店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ　https://www.yamato-se.co.jp/

源氏物語と藤原氏

紫式部の結婚と藤原道長の策略

紫式部の結婚と出産

紫式部は長徳4年（998）の冬に、藤原宣孝（ふじわらののぶたか）と結婚した。結婚した時の式部の年齢は26歳前後と考えられ、当時としては晩婚だった。この頃式部は越前に住んでいたが、長徳4年の春頃、父を残して単身で都に戻り、宣孝との結婚に向けての準備をしていたと考えられる。宣孝は長徳元年（995）に筑前守の任期を終えて、帰京しており、46歳になっていた。宣孝の曾祖父は醍醐天皇の外戚で右大臣を務め、父は道長の嫡妻である源倫子（ともこ／りんし）とも遠戚にあたる人物だった。宣孝にとって式部は又従弟にあたり、式部の父・為時とは元同僚であったことから、式部とは懇意であったはずだ。宣孝には既に妻子があったが、式部に求婚していた。当初、式部は宣孝の求婚を煩わしく感じていたが、次第に惹かれるようになったという。宣孝は有能な官人でありながら、賀茂祭（葵祭）で舞を披露する役を務めるなど、風流な側面を持つ人物だったことから、式部とは話が合ったのかもしれない。

長保元年（999）、式部と宣孝の間に娘の賢子（けんし）が誕生する。平安時代の結婚は、正妻以外は夫が妻の家を訪れる通い婚（妻問婚・つまどいこん）が主流であったため、式部は夫や父が不在の自宅で娘を育てることになり、心細い日常であったと推察される。式部は宣孝が訪問してくるのを待つのみで、宣孝が心変わりをして自宅の前を素通りしてしまうと嘆くこともあったという。長保3年の春、為時が越前守の任を終えて帰京したが、官職に就くことはなく、天皇に詩や和歌を献じるなど文人としての評価が高まった。父の活動は、式部の文学に対する姿勢に大きな影響を与えたと想像できる。

長保3年4月、夫の宣孝は病死し、式部は結婚後2年半で寡婦となった。式部は夫を亡くしたことに対し、「思い慰める方法すらありませんが、寂しさのあまり自棄的にならないように心がけている」と自らの日記に記述しており、不安な心情が伺える。宣孝との結婚生活で経験したことは、「源氏物語」の世界に様々な形で描写されることになる。

平安神宮大極殿（へいあんじんぐう だいごくでん）

京都市左京区
岡崎入江町、岡崎西天王町

築年：明治28年（1895）　重要文化財指定年：2010年
構造：木造、建築面積403.96平方メートル、入母屋造、本瓦葺1棟

平安神宮の建築は、明治28年、平安遷都千百年紀念祭・第4回内国勧業博覧会の会場施設として、平安宮大極殿院を模して計画されました。並行して背後に桓武天皇を祀る本殿が建てられ、竣工とともに神社施設となりました。全国からの募金により建設され、設計は宮内省技師、施工は清水組でした。平安神宮の建築は、古代建築の知見と京都の建築技術を集積し、古代を指向した独特の建築空間を形成しており、高い意匠的価値があります。また、京都の建築的伝統を支えた事業のひとつとして、歴史的にも重要です。

藤原道長の娘 彰子の入内

長徳元年（995）、道長は左大臣に昇進し、翌年には政権継承で反目していた兄・道隆の息子である伊周（これちか）、隆家が、花山法皇を襲撃する事件（長徳の変）が発生し、伊周と隆家は左遷された。道長は最大の政敵を自然と退けることができ、政権の座に就いた。しかし、長徳4年（998）3月、道長は重い腰の病を患い、一条天皇に出家の意向を表明し、左大臣の辞意を示した。この時の道長の娘・彰子は数えで11歳、長男の頼通（よりみち）は7歳で、彰子の入内や頼通の元服より前に、道長が出家もしくは死去していれば、道長の一代で終わる政権だった。道長の辞意に対し、一条天皇は許可せず、道長は政権にとどまった。

同年7月、病中にあった道長は、彰子の入内に向けて動きだした。その理由は、道隆の娘・定子（ていし／さだこ・一条天皇の后）に懐妊の兆しがあったからである。定子が第一皇子を産めば、政権から離れた伊周らが一条天皇の最強の身内になってしまい、道長とその一族の影響力が削がれかねない。定子から皇子が生まれる前に、道長は自分の娘を一条天皇の后にしたかったのである。長保元年（999）11月、彰子は入内し女御となり、同時期に定子は第一皇子の敦康（あつやす）を出産した。道長としては、彰子の存在感が低下しないうちに、彰子を皇后とすること（立后）を急がねばならなかった。一条天皇は彰子の立后（りっこう）にはためらいがあったとされるが、道長の主導により、彰子は中宮となった。これは皇室での一帝二后の初例とされている。

源氏物語の執筆を開始

長保2年（1000）2月、彰子に対する立后の儀が行われ、彰子は中宮、定子は皇后と称されることになった。彰子の立后は道長の政治力が発揮されたから実現したものの、一条天皇は彰子よりも定子を寵愛し、定子は懐妊する。しかし、同年12月、定子は女児の出産時に亡くなり、后は彰子のみとなる。定子の死を嘆き悲しんでいる一条天皇を見て、道長は一条天皇が彰子に関心が向くようにする仕掛けを考えた。それが紫式部に「源氏物語」を書かせ、一条天皇に読ませることだったと推察される。源氏物語の起筆時期は定説が定まっていないが、当時の紙は大変高価で、有力者の支援がなければ長編の物語を書き続けることは難しいので、式部の文才を知っていた道長が関与していたことはほぼ間違いないといわれている。

（文・写真 木下直也）

主要参考文献「紫式部と藤原道長」講談社現代新書

大極殿遺址碑（だいごくでんいしのひ）

京都市上京区千本通丸太町
上る西側（内野児童公園内）

建立年：1895年
建立者：京都府参事会

大極殿とは大内裏朝堂院の正殿で、即位等国家的儀礼や諸政が行われる場所でした。貞観18年（876）、創建後初めて焼失し、再三の被災で修復再建が繰り返されましたが、安元3年（1177）の大火で焼失して以降，再建されませんでした。明治28年（1895）、平安遷都千百年紀念祭にあたり、大極殿をこの地に定め石標が設置されました。なお、現在はこの位置より南東で遺跡が見つかっています。

紫式部と藤原道長の略年表

天延元年（973）	藤原為時次女として誕生
永観2年（984）	円融天皇が譲位し、花山天皇が即位
寛和2年（986）	花山天皇が出家し一条天皇が即位（寛和の変）
永祚2年（990）	藤原兼家が摂政に就任
	一条天皇に藤原道隆（兼家の長男）の娘・定子が入内後、中宮になる
	藤原兼家が死去。道隆が関白に就任、その後摂政に就任
正暦2年（991）	詮子（道長の姉で一条天皇の母）が「東三条院」を称する（女院の初例）
長徳元年（995）	道隆死去。道兼死去。道長に内覧宣旨
長徳2年（996）	父・為時とともに越前に下向
	長徳の変が起こる。藤原伊周が左遷
長徳3年（997）	式部は越前を離れ単身帰京
長徳4年（998）	式部は藤原宣孝と結婚
長保元年（999）	式部は娘の賢子を出産
	道長の娘・彰子が一条天皇に入内
長保2年（1000）	一条天皇の中宮・定子（伊周の妹）が皇后になり、彰子が中宮となる（一帝二后の初例）
長保3年（1001）	式部の夫・宣孝が死去。源氏物語執筆開始か（諸説あり）。
寛弘3年（1006）	式部は女房として彰子に出仕（諸説あり）
寛弘5年（1008）	「紫式部日記」の執筆開始。

主要参考文献　「紫式部と藤原道長」講談社現代新書

【2024年 NHK大河ドラマ】

光る君へ 全体相関図と主な登場人物

（枠内下段は演者）

まひろの家族とその周囲の人たち

- まひろの父 ふじわらのためとき 藤原為時 岸谷五朗
- 親子
- 姉弟
- まひろの弟 ふじわらののぶのり 藤原惟規 高杉真宙
- まひろの夫 ふじわらののぶたか 藤原宣孝 佐々木蔵之介
- むらさきしきぶ 紫式部 / まひろ 吉高由里子
- 藤原惟規の乳母 いと 信川清順
- いとの恋人 ふくまる 福丸 勢登健雄
- まひろの従者 おとまる 乙丸 矢部太郎
- 乙丸の恋人 きぬ 蔵下穂波

特別な絆

道長の一族とその周囲の人たち

- ふじわらのみちなが 藤原道長 柄本 佑
- 兄弟・姉弟
- 道長の長兄 ふじわらのみちたか 藤原道隆 井浦 新
- 道長の次兄 ふじわらのみちかね 藤原道兼 玉置玲央
- 道長の姉 ふじわらのあきこ 藤原詮子 吉田 羊
- 親子
- 藤原道隆の嫡妻 かたしなのたかこ 高階貴子 板谷由夏
- 兄弟・姉弟
- 藤原道隆の嫡男 ふじわらのこれたか 藤原伊周 三浦翔平
- 藤原道隆の次男 ふじわらのたかいえ 藤原隆家 竜星 涼
- 一条天皇の中宮 ふじわらのさだこ 藤原定子 高畑充希
  - 第１子を懐妊中に兄の藤原伊周と隆家が起こした長徳の変で出家するが、定子を寵愛する一条天皇に呼び戻され、敦康親王と内親王を産む。
- 親子
- 道長のもう一人の妻 みなもとのあきこ 源 明子 瀧内公美
- 道長の嫡妻 みなもとの ともこ 源 倫子 黒木 華
- 親子
- 道長の従者 もずひこ 百舌彦 本多 力
- 道長の異母兄 ふじわらのみちつな 藤原道綱 上地雄輔
- 姉弟
- 道長の嫡男 ふじわらのよりみち 藤原頼通 渡邊圭祐
- 道長の長女 ふじわらのあきこ 藤原彰子 見上 愛
  - 12歳で一条天皇に入内、翌年中宮となる。皇后となった藤原定子の没後、定子が生んだ皇子・敦康親王の養母となり、自身も2人の皇子を産む。
- 兄妹

天皇家の人たち

- 66代天皇 いちじょうてんのう 一条天皇 塩野瑛久
- 67代天皇 さんじょうてんのう 三条天皇（居貞） いやさだ 木村達成

平安貴族の面々

- 陰陽師 あべのはるあきら 安倍晴明 ユースケ・サンタマリア
  - 天皇や貴族のために占いや祈祷、呪詛を行い、将来道長が台頭することを見抜き、道長に彰子の入内を進言するなど、政局に多大な影響を及ぼす。
- 道長の友人 ふじわらのきんとう 藤原公任 町田啓太
- 安倍晴明の従者 すまる 須麻流 DAIKI
- 道長の後輩 ふじわらのゆきなり 藤原行成 渡辺大知
- 藤原定子の女房 せいしょうなごん 清少納言 / ききょう ファーストサマーウイカ
  - 藤原定子の女房で、兄と弟の不祥事で内裏を追われた定子を慰めるため「枕草子」を執筆（長保3年頃）。
- 道長の友人 ふじわらのただのぶ 藤原斉信 金田 哲
- 道長の同僚 ふじわらのさねすけ 藤原実資 秋山竜次
  - 代々の天皇や公卿から信頼が厚く、要職を歴任。64年間に及ぶ日記「小右記」を書き残す。
- 藤原彰子の女房 あかぞめえもん 赤染衛門 凰稀かなめ
- 道長の義兄 みなもとのとしかた 源 俊賢 本田大輔
- 道長のいとこ ふじわらのあきみつ 藤原顕光 宮川一朗太

越前で出会う人たち

- 宋の見習い医師 チョウミン 周明 松下洸平
- 宋の商人 チュレンツォン 朱仁聡 浩歌
- 越前国府の官吏 みなもとのみつまさ 源 光雅 玉置孝匡
- 越前国府の官吏 おおのくにかつ 大野国勝 徳井 優
- 宋の通事 みくにのわかまろ 三国若麻呂 安井順平

歴史の舞台となった街道

日光御成街道

歴史研究者
安藤優一郎

徳川歴代将軍の東照宮参詣道

日本橋を起点とする五街道のなかでも、日光街道は日光東照宮への参詣道として江戸幕府から非常に重視された。神君と称された幕府の創始者徳川家康の墓所が東照宮にあったからである。

歴代将軍が日光の家康墓所に参詣することは日光社参と呼ばれ、諸大名も参詣が義務付けられた。将軍の行列と諸大名の行列が合体することで、日光に向かう行列は大行列に膨れ上がる。幕府は日光社参を通じて将軍の権威をアピールすることにより、権力基盤の強化を目論んだ。

日光街道とは江戸と日光を結ぶ街道だが、同じ五街道の奥州街道と途中まで一緒の道を進んだ。下野国宇都宮までは道を共有したが、宇都宮で分岐する。奥州街道はそのまま陸奥国の白河に向かい、日光街道は日光へ向かった。

日光の名称が付いた街道は日光街道のほか、三つあった。日光御成街道、日光街道壬生通り、日光例幣使街道の三つだが、日光街道に比べるとあまり知られていないだろう。

日光社参の際には日光街道が使われたと思われがちだが、実際は違う。江戸を起点とする日光街道は最初の宿場千住宿を過ぎると、草加・越谷・粕壁・杉戸・幸手宿と続くが、将軍が日光街道を使ったのは幸手宿からである。それまでは日光御成街道を進んだが、同街道は江戸日本橋が起点ではなかったため、それまでは中山道を進んでいる。

日光街道壬生通りや日光例幣使街道にしても、江戸が起点ではない。日光街道壬生通りは日光社参で使われたこともあったが、日光例幣使街道は朝廷から東照宮に派遣された勅使（例幣使）が進んだ街道であり、社参の折に将軍が通行した参詣道ではなかった。四つの日光街道の使い道はそれぞれ異なったが、将軍の権威をアピールする役割を担った点では共通していた。

日光東照宮の建立

元和2年（1616）4月17日、日光東照宮の祭神となる家康は駿府城で波乱の生涯を終える。享年75才だった。

その遺言により、遺骸は久能山にいったん埋葬されたが、翌3年（1617）には家康を祀る東照社が建立された日光山に改葬される。日光への改葬も家康の遺言に従った対応であった。家康が葬られた日光山は日光権現を仰ぐ山岳信仰の霊場として古来より知られたが、家康が改葬されたことで徳川家の聖地としての顔も持つ。後に、孫の三代将軍家光も葬られた。

同年2月、朝廷は家康に「東照大権現」という神号を与え、「東照神君」と称されるようになる。この神号に因み、東照社と名付けられたわけだ。東照社を管轄したのは天台宗に属する日光山輪王寺だが、そのトップの貫主は皇族つまり宮様だった。出家した親王である法親王が住職として迎えられたのである。承応3年（1654）、後水尾上皇の第三皇子守澄法親王が第五十五世日光山貫主の座に就いたが、実は寛永寺の貫主も兼ねていた。

天台宗の僧侶天海を厚く信頼した家光は、その願いを容れて上野台地（現在の上野公園）に寛永寺を創建する。天台宗の開祖最澄は京の鬼門（北東の方角）に比叡山延暦寺を創建して京都を鎮護する役割を担わせたが、天海はその顰みに倣い、江戸城の鬼門にあたる上野台地に寺院の建立を願い、認められたのである。

山号は東の比叡山ということで東叡山と名付けられ、寺号は創建時の元号が寛永であることから寛永寺と命名された。延暦寺創建時の元号が延暦であったことに倣った。延暦寺をモデルに創建された寛永寺は芝の増上寺とともに将軍の菩提寺となったため、歴代将軍の霊廟も置かれた。日光山と同じく徳川家の聖地となるが、その貫主を法親王に兼任させることで寛永寺の寺格は著しく高まる。

明暦元年（1655）10月、日光山と寛永寺の貫主を兼ねた守澄法親王は天台宗の総本山たる延暦寺の住職（天台座主）に任ぜられた。そして、翌11月には輪王寺宮の称号を与えられた。以後、両寺の貫主は輪王寺宮門跡と称されたが、ふだんは寛永寺の本坊にいた。その跡地には現在東京国立博物館が立っている。

家康を日光に改葬した際、二代将軍秀忠により東照社が造営されたが、面目を一新するのは三代家光の時である。寛永11年（1634）に、家光は総工費56万8千両を掛けて社殿の大改築を開始した。同13年（1636）、壮麗な社殿が完成する。正保2年（1645）、東照社に宮号が下賜されて、東照宮と呼ばれるようになる。ここに、日光東照宮が誕生

する。以後、日光には一般庶民まで参詣するようになる。合わせて、日光街道の整備が進んだ。現存する杉並木も植樹された。

家康の祥月命日にあたる毎年4月17日に、東照宮では例祭が執行された。例祭には日光社参と称し、将軍みずから参詣することもあった。

日光社参の嚆矢は、家康の遺骸が日光に改葬された元和3年のことである。以後、12代将軍家慶による最後の社参まで都合19回に及んだが、その大半は家光の時代だった。家康以外の将軍がすべて日光社参を行ったのではなく、二代秀忠、三代家光、四代家綱、八代吉宗、十代家治、十二代家慶だけが日光に参詣した。

将軍警備の都合で岩槻城に宿泊

既に述べたとおり、江戸城を出立した将軍の行列は当初日光街道を通っていない。筋違御門沿いに走る神田川を渡ると、同じ五街道の中山道に道を取り、現東京大学本郷キャンパス近くの本郷追分まで進んだ。

追分からは日光御成街道に道を取っている。将軍が江戸城の外に出ることを御成と称したため、将軍が通行する街道は御成街道（御成道）と呼ばれた。

本郷追分を起点とする御成街道は岩淵・川口・鳩ヶ谷・大門・岩槻宿などを経て日光街道に合流したが、日光社参の初日は岩槻城で宿泊するのが慣例だった。将軍が泊まるとなれば警備の関係上、宿所は城であることが望ましかったからである。

日光街道を進む場合、江戸を出ると古河宿まで城がなかった。将軍を岩槻城で宿泊させるため、岩槻宿を通過する御成街道が日光街道と並行する形で設定されたのだろう。

2日目は、岩槻宿を出て次の幸手宿の手前まで日光御成街道を進んだ。中山道本郷追分からの全長約13キロが日光御成街道であり、幸手宿手前で日光街道に合流して御成街道は終わる。幸手宿からは日光街道を進み、2日目は古河城で宿泊した。3日目は宇都宮宿で宿泊し、4日目に日光に到着した。日光では連泊している。

盛大な参詣行列

日光社参では江戸在府中の諸大名も将軍に随行することが義務付けられ、莫大な出費を強いられた。沿道の農村にしても大行列の荷物を運ぶ人足や馬の調達を命じられ、同じく重い負担となる。助郷役として賦課されたため、無償奉仕だった。

享保13年（1728）、八代将軍吉宗が65年ぶりに行った日光社参は次のとおりである。

4月13日午前零時、行列の先頭を勤める奏者番の秋元喬房（川越藩主）の部隊が江戸を出発した。その後、御供の諸大名の部隊が続いた。吉宗の前後を直接固める親衛隊二千人が出発したのは午前6時で、行列最後尾の部隊が出発したのは午前10時。総人数は分からないが、出発に十時間も要した大行列であった。

将軍、諸大名、旗本から構成された大行列は、中山道から日光御成街道に入り、初日は岩槻で宿泊した。将軍は岩槻城が宿所だったが、大名や旗本たちは岩槻宿とその周辺に宿泊しただろう。

翌14日は、幸手宿の手前で日光御成街道から日光街道に入った。次の栗橋宿の先には坂東太郎の異名を持つ関東一の河川・利根川が流れていたが、橋はなかった。そのため、通常は渡し船で行き来したが、日光社参の際は船橋が仮設された。渡し船だけでは大人数を捌き切れなかったことに加え、安全性も考慮して船橋が造られたのだろう。多くの船を並べて繋ぎ、その上に板を渡して臨時の橋としたのが船橋である。

利根川の川幅が188間（約388メートル）もあったため、50艘余りの船が横に並べて繋がれた。その上に板を幾重にも渡し、さらに馬が通りやすくするよう砂が敷かれたが、それだけではない。船は川の上に浮いている状態であり、揺れると不安定なため、岸から伸ばした綱でしっかりと固定している。

幕府はこの船橋の準備に4カ月を要している。費用も2万両掛かったという。日光への行きと帰りに使われた後、船橋は解体された。

利根川を渡った後、大行列は古河で宿泊した。15日は宇都宮に宿泊し、16日に日光に到着した。家康の祥月命日の17日、吉宗は東照宮に参詣している。18日には日光を出発し、帰途に就いた。

日光社参の際の総費用については次の安永5年（1775）時の数字が知られている。何と22万3千両も掛かったという。これは幕府の出費であり、随行を命じられた諸大名や旗本の出費はカウントされていない。大行列の荷物を運ぶ人足と馬は関東一帯から動員されたが、その数たるや、人足はのべ4百万人、馬はのべ30万頭が徴発された（高埜利彦『元禄・享保の時代』集英社）。日光社参では幕府や諸大名が莫大な出費を余儀なくされ、農村も過重な負担を強いられたことは明らかであった。

そのため、幕府も諸大名や農村の負担に配慮し、四代家綱以降は日光社参を控えるようになる。毎年の例祭には将軍の名代という形で代参使を日光に派遣することで済ませた。

日光への代参使には、吉良家などの高家が任命された。高家は殿中儀礼の指南や勅使の接待を職務としていたが、代参使も勤めたのである。

太田道灌公像（芳林寺内）

文明18年（1486）、太田道灌は主君・上杉定正の館（神奈川県伊勢原）で暗殺され、父の道真（どうしん）と道灌の養子・太田資家（すけいえ・岩槻城主）が伊勢原に行き、道灌の遺骨や遺髪をもらい受け、芳林寺に葬りました。

日光御成街道の道標（芳林寺近隣）

芳林寺
さいたま市岩槻区本町1丁目7-10
岩槻駅から徒歩約5分

郷土 史跡めぐり〈群馬県渋川市北牧〉

中ノ峯古墳

軽石層の下から発見された古墳

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門調査役 篠原正洋

❶ 中ノ峯古墳全景（南から撮影）

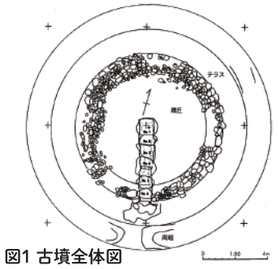


図1 古墳全体図
墳丘の側面にのみ葺石が施され頂部は平坦となる。

❷ 石室内部の様子

はじめに

私は今、当財団職員として上信自動車道吾妻東バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に携わっています。発掘調査が行われているところは、主に東吾妻町内で、そこは榛名山の北麓の斜面が吾妻川に向かって次第に裾野を広げる地形にあります。

榛名山は今から約１５００年前の古墳時代に大規模な噴火を2回起こしました。6世紀の初めと中頃のことです。この2回の噴火による火山噴出物は、古い方から榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA）、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP）と呼ばれています。テフラとは火山灰や軽石、火砕流などの総称です。

このテフラは、榛名山北麓から東麓にかけて降り積もっており、私が携わる発掘現場でも、渋川テフラ（通称FA）の下から住居や水田、畑などが見つかっています。平成24年に金井東裏遺跡で見つかり、注目を集めた「甲を着た古墳人」もこのFAで埋まっていました。

今回紹介する古墳は、榛名山の二度の噴火のうち、伊香保テフラ（通称FP、軽石が主体）で完全に埋没したあと、約１５００年の時を経て非常に保存のよい状態で発見された中ノ峯古墳（渋川市）です。近くにある国指定史跡の黒井峯遺跡（渋川市）もこのFPに埋もれていました。

古墳の立地と調査保存の経緯

中ノ峯古墳は、榛名山から北東に9.5㎞離れた渋川市（旧子持村）北牧にある円墳です。吾妻川の左岸に位置し、子持山南麓を流れ下る二つの小河川によって東西を分断されてできた細長い丘陵地にあります。

中ノ峯古墳は、昭和54年、土地改良のために約1.8ｍの厚さで堆積していた軽石（FP）を取り除く作業中、偶然発見され、同年、保存整備を前提とした発掘調査が行われました。そこには、先人が残した貴重な文化財を村民の歴史学習に活用するとともに、郷土愛の高揚と文化の向上を図ろうとする関係者たちの強い思いがありました。そして翌年、昭和55年には、県指定史跡となり現在に至っています。

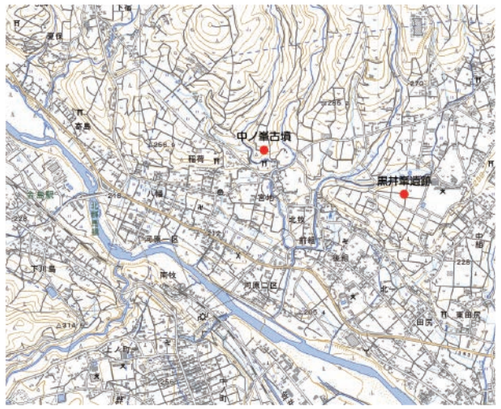
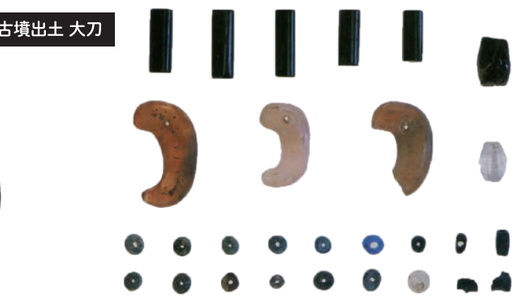


図2 古墳の位置
（国土地理院2万5千分の1地形図「金井」使用）

❹ 中ノ峯古墳出土 鉄鏃



❸ 中ノ峯古墳出土 玉類

❺ 中ノ峯古墳出土 大刀

（正面）（側面）

❻ 中ノ峯古墳出土 須恵器

古墳の概要と特徴

中ノ峯古墳は古墳時代の後半に多く築かれた小型の円墳です。直径は約９ｍ、高さは約２ｍの大きさです。以下、特筆すべき特徴をいくつか紹介します。

■築造の時期

発掘調査により土層（地層）を観察すると、中ノ峯古墳は、FA層の上に築造されていたことが分かりました。古墳は、その後厚く降り積もったFP層に埋まり、築造時の姿を良好に残したまま発見されたのですから、築造時期はFA層とFP層の中間、つまり、西暦５００年頃から数十年の間となります。発見当初は、6世紀の古墳研究に新しい知見を加える重要な遺跡であると位置づけられました。

■石室

石室は、古墳の南側に開口する横穴式石室で、埋葬空間は細長く、遺体を置く部屋が広くならない初期の形です。横穴式石室は、群馬では古墳時代の後半に新たに導入された埋葬施設で、竪穴式石室が基本的には一人用であるに対して、複数人の追葬も可能となる施設です。追葬とは、人を一度葬ったあとに、同じ場所に別の人を追加して葬る風習です。現に、中ノ峯古墳は、追葬も含めて、5体（成人男性2・成人女性1・乳幼児2）の人骨が出土しています。特に興味深いのは、古墳が完全にFP層に埋没したあと、わざわざ入口を掘り起こして追葬していることです。

■出土遺物

玉類（勾玉・管玉などにひもを通して首飾りとしたもの）、大刀・鉄鏃・須恵器などの遺物が出土しています。追葬が行われているため、副葬品として石室に納められた時期にはやや幅があります。

おわりに

中ノ峯古墳は小さな古墳ですが、榛名山の噴火との関連で、築造時期がはっきりとしており、当時の姿をそのまま残して掘り出され、保存整備されている貴重な古墳です。出土遺物は、渋川市埋蔵文化財センター（渋川市北橘総合支所2階）で見ることができます。みなさんも、一度、訪れてみてはいかがでしょうか。

参考文献
・「古墳人、現る　金井東裏遺跡の奇跡」
　2019（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
・「ぐんま古墳探訪　見て学ぶ東国文化の輝き」
　2017群馬県教育委員会事務局文化財保護課
・「中ノ峯古墳発掘調査報告書 ―軽石中から発見された古墳―」
　1980群馬県北群馬郡子持村教育委員会

図版・遺物写真 提供
・渋川市教育委員会

シリーズ 群馬の芸術家 25

原 誠二

美術研究家　染谷 滋

穏やかな水景図に忍び寄る時代の不安

圧倒的な大作「水景図―山塊」

今回の(株)ヤマトでの展示は7メートルを超す大作が来場者を惹きつける。まずはその作品から見てみよう。

大きな岩山が左右に配置された画面。霧を思わせる白い光が谷間を輝かせている。工場のような建造物が確認できるところもある。画面右端の海面近くには、道路を照らす街灯のような明かりも見える。空は深い青から水平線近くの朝焼けに輝く黄金色へと変化し、海面は黒い闇の中に静まりかえっている。

自然の風景を描いたかに見える画面の中に、赤と青の不思議な物体が置かれている。原誠二の作品を見慣れた者にはお馴染みの形態だ。そして何よりも不気味なのは、海面に開いた大きな二つの穴だろう。音もなく水が吸い込まれて底が知れない。

作品の前に立つと、画面を支配する静けさと色彩の美しさに心を奪われる一方で、忍び寄る不安に胸が苦しくなる。この不思議な感覚こそが何よりの魅力であろう。

南箕輪村から東京へ

原誠二は一九五九(昭和三四)年二月八日、長野県上伊那郡南箕輪村に生まれた。東に南アルプス、西に中央アルプスを望む南箕輪村は、来年村政一五〇周年を迎えるという歴史ある村で、一万五千人余りの人口は村の中では全国的に見ても多く、しかも増加傾向にあるという。実家には今でも兄の一家が住み続け、南箕輪村は今でも原誠二の故郷である。

村内にある上伊那農業高校で美術部に所属。油絵で長野県展に入選したこともあったというから、絵の才能は十分にあったのだろう。

武蔵野美術大学を受験したが失敗。高校卒業後美術系の予備校に通ったりするうちに、画材屋で見た岩絵の具の美しさに魅了され日本画に転向。一九七九年に多摩美術大学に入学して日本画を学ぶことになる。

多摩美の二年生からは加山又造教室に所属した。加山又造(一九二七～二〇〇四)は戦後の日本画を現代的感性でリードした人物で、「現代の琳派」などとも称された。原が学んだのは加山が五〇代の時期で、元気盛りの頃になる。「いろいろな事を経験しなさい」という教えが記憶に残った。

卒業制作の《室内風景・時》は、三年生の頃から始めた「椅子シリーズ」で、毎日のように通った喫茶店でのデッサン修行の成果だが、人の気配だけが残る風景には、その後の原の画風に共通するものが感じられる。

高崎へ、思わぬ災難

原誠二の人生を大きく変えたのが、一九八九(平成元)年四月からの高崎芸術短期大学での日本画専任講師の仕事だった。

高崎芸術短大は一九八一年に音楽の専門校として設立した高崎短大に始まる。八八年に美術科を増設して高崎芸術短大となり、原が就職した八九年には学生数を大幅に増加させていた。

東京から高崎へと転居した原は、既に結婚もしていて、高崎を第二の故郷と決めて活動する。九一年には最初の個展を銀座で、引き続き高崎のユーホールでも個展開催。勧められて群馬県展や高崎市民展にも出品するようになった。

軌道に乗ったかに見えた画業だったが、高崎芸術短大での仕事は苦難の連続だった。経営陣との折り合いが悪かったからだが、事態は深刻さを増す。

高崎芸術短大は二〇〇四年に創造学園大学へと規模を拡大したが、杜撰な経営が次第に明るみに出て社会問題となり、職員への給料が支払われない事態になって行った。二〇二三年、遂に文部科学省から解散命令が出されて廃校へ。

この間の原の人生は、画業とは全く無関係な紛争に巻き込まれることになるのだが、それはまた別の物語だ。

現在を映す鏡として

職場での紛争が原誠二にもたらしたものは、絵で生きるしかないという覚悟だった。

「水景図」と作者が呼ぶシリーズは、当初「水平線」シリーズと呼んでいた。広い空と海を思わせる水面に浮かぶ島が描かれただけのモチーフだが、空も島も表情は豊かで、色彩も豊富だ。

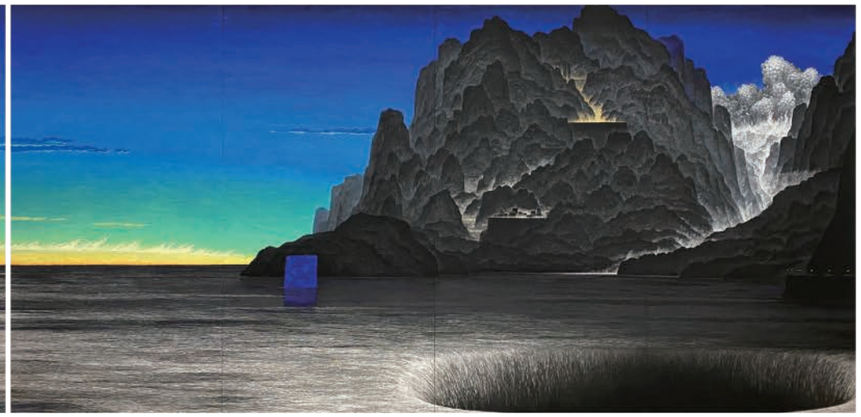
島と見える形の始まりは岩だったようで、角ばった岩だけを画面いっぱいに描き、その表面に草花などの形がまるで化石のように散りばめられた美しい作品も描かれた。

原にとって岩は色そのものだった。日本画で使う岩絵の具は、様々な岩石を砕いて使われるからだ。原のアトリエには、ガラス瓶に収まった岩絵の具が大量に置かれていて、まるで画材屋のコーナーのようだ。岩絵の具の美しさに魅せられた原が、色の閉じ込められた岩をモチーフとしたのは頷ける。岩は島となって水面に浮かび、水景図が生まれた。

静かな水景図に異変が生じたのは二年前のことだ。水面に開いた穴「奈落」の登場だ。それ以前から不安な影が空を覆い、水景図には嵐の前のような不気味さが漂い始めていた。

昨年のノイエス朝日を会場とした個展で、原はこう記している。「私は以前美術とは美しさを追求し、そこから対象の本質に迫るものだと思っていました。しかし今は、私達表現者は現在を映す鏡をもっていないといけないのではと思っています。」

美しさを追求してきた原誠二の作品に、時代の不安が忍び寄る。私たちは否応なくそんな時代を生きている。



水景図―山塊　2024 182.0×736.0

略歴 **原誠二 SEIJI HARA**

1959 長野県南箕輪村に生まれる。
1979 多摩美術大学絵画科日本画専攻入学。
1981 長野県展日本画部に初入選。以後出品を続ける。
1983 多摩美術大学絵画科日本画専攻卒業。引続き大学院に進学。
1984 創画会春季展入選。以後、1990年まで出品。
1985 多摩美術大学大学院絵画研究科修了。
1987 長野県展を運営する信州美術会会員。1997年退会。
1989 高崎芸術短期大学専任講師となり高崎に転居。
1991 群馬県展に初入選。
1992 セントラル美術館日本画大賞展で佳作賞。
1993 デンマーク及びルクセンブルグの国際日本版画展に出品。
1994 三渓園日本画展に入選。
1999 第1回トリエンナーレ豊橋に入選。以後度々入選。
2001 トリエンナーレぐんま展に出品。以後毎回。
2004 現代日本絵画展で渡辺翁記念文化協会賞。
2007 第9回雪梁舎フィレンツェ賞展に入選。
第57回群馬県展で知事賞。
2012 第62回群馬県展で山崎種二記念特別賞及び近代美術館奨励賞。
2013 豊嶋康男と「クロスセッション」(高崎シティギャラリー)
信州高遠美術館で「原誠二日本画展」開催。
2016 伊那市・かんてんぱぱホールで「原誠二日本画展」開催。
2020 前橋・ノイエス朝日で可視展。以後毎年。
2024 高崎市美術館「視覚の冒険者たち」に出品。
その他、個展・グループ展等多数。

お客様紹介

森産業株式会社

群馬県桐生市

沼田工場をリニューアル

キノコの種菌を製造・培養

森産業株式会社様は、キノコの種菌売上シェア日本一で、優良品種の製造・販売や栽培指導など、生産者のキノコ事業を支援するための総合的なサービスをワンストップで提供しています。同社沼田工場は、令和6年4月にキノコの種菌を製造・培養する設備を設置した工場にリニューアルされました。建設プロダクトのヤマトは、同工場リニューアルの建築・設計・施工に携わりました。

リニューアルされた沼田工場の検査室

森産業株式会社 会社概要

設立　昭和18年4月

事業内容　きのこ種菌・菌床の製造販売
きのこ栽培施設の設計・施工・資機材販売
きのこ加工食品・飲料の製造販売
きのこ類の生産販売
一般家庭用商品の製造販売

本社　群馬県桐生市西久方町1-2-23

沼田工場　群馬県沼田市町田町1600

森産業株式会社

製造部長 松本 忠 様

当社は、キノコを栽培している生産者さんにお使いいただくキノコの種を製造する会社です。従来、キノコの種を製造・育成する工場は、群馬県桐生市にありましたが、その機能を沼田市の当工場に移設し、リニューアル工事を実施いたしました。

雑菌が混ざらない状態でキノコの種を製造するためのクリーンルームと、温度・湿度・炭酸ガス(二酸化炭素)濃度を管理して育成するための培養室をリニューアルしていただきました。また、森産業が所有する菌株を管理し検査する、種菌管理室の工事も施工していただきました。

ヤマト様からご提案いただいた工事の計画がとても分かりやすく、工事が始まってからも段取り通りに進み、安全管理も徹底されており、安心感がありました。また、部屋の壁紙の色など、様々なご提案をいただき、大変助かりました。工事に関わる皆さんは礼儀正しく、信頼できました。今回の工事は、ヤマト様にお願いして良かったと思っています。

きのこを通して人々に喜びを

「実力」品種の数々

森産業の人気No.1の菌床しいたけ品種「森XR1号」をはじめ、全国的に最も使用されている原木しいたけ品種「にく丸」、圧倒的シェアを誇る舞茸品種「森51号」など、実力ある品種を多数擁しています。半世紀以上にわたる品種開発の歴史の中で、業界トップレベルの保有数を誇る菌株の中から交配・育種を重ね、生産者様のニーズに合った品種を開発、厳選してご提供しています。

実力品種の数々

キノコによる健康と食文化の創造

一般のお客様にきのこをもっと楽しんでいただくため、種菌メーカーならではの独創的な発想で、種から食品まできのこを軸とした商品の企画・開発・販売を行っています。

お部屋で手軽にキノコ栽培

森産業のしいたけ栽培キットは、国産の樹木を使用し国内で栽培された純国産きのこであることを証明する「どんぐりマーク」の使用許諾を受けた農場で作られた、しいたけ栽培キットです。安心・安全な国産しいたけの栽培体験が気軽に楽しめる商品で、お家で育てやすい種菌を選んでいます。

森のしいたけ農園

オリジナル加工食品・乾物

森産業の通販サイトでは、きのこを手軽に美味しく召し上がっていただくため、オリジナルの加工食品や乾物を販売しています。森産業が80年以上にわたり築き上げた全国のネットワークを通じて、生産者の皆様より上質なきのこを仕入れ、乾物や加工品として安心安全な美味しいきのこを皆様の食卓にお届けしています。

森のキノコパスタ

森のキノコごはんのもと